

2022年11月26日(土)

老球の細道702号

サッカー・ワールドカップ、日本アップセット(番狂わせ)

会津バスケットボール協会 室井 富仁

1968年メキシコ五輪で日本代表は銅メダルを獲得した。私は中学3年生だったが、この結果に影響されて学校の昼休み時には毎日のように校庭でサッカーに親しんだ。狭い校庭に何チームも入り乱れてゲームをしていた古き良き時代であった。

当時、日本代表選手や日本中の指導者の指導に当たっていたのがドイツ(当時西ドイツ)から招聘した故クラマー氏であった。私の高校、大学時代の今は亡き親友がサッカー選手(後にJリーグ前身チームの監督)だったので、クラマーさんの話をよく聞かされていた。いでたちは小柄でその辺にいる普通の叔父さんだったが、知的で抜群のデモンストレーション能力を持っていた。私もバスケットの指導者としてこうありたいと影響を受けた。

日本代表の森保監督はドイツ戦前の記者会見でサッカー後進国だった日本が模範とし、背中を追いかけて来たドイツに対して感謝の言葉を述べ、特別な一戦になることを明言した。そして「日本が成長した姿を見せたい。世界に大きなサプライズを起こしたい」とアップセットを起こす決意表明をして、実際翌日世紀のアップセットを実現させた。

バスケットボール界も来年日本、インドネシア、フィリピンにおいて男子ワールドカップが開催される。サッカーができたことをバスケットボールもできないはずはない。サッカーの成功の原因を「逆他山の石」にして学ばなければならない。

そもそもプレイヤーやチームのパフォーマンスには調子のよい時や悪い時がある。どんなに強いチームでも最悪の状態になる時もある。どんなに弱いチームでも絶好調になる時がある。格下の相手が格上の相手を倒すためには、こちらと強みで相手の弱みをたたけばアップセットも可能となる。自チームの「石」で相手チームの「豆腐」をつぶす。そのために戦略、戦術、作戦、スカウティング、コンディショニングなどに最善の準備をする。

今回のドイツ戦で森保監督はもう一つの準備であるマインドセットも重視した。「名前負け」しないことを選手に訴えたという。決めつけの刃を自分に向けてはいけない。

「世界の強豪をリスペクト(尊敬)しすぎることなく、同じ目線で戦おう」

元日本代表監督岡田武史氏も朝日新聞でドイツ戦の講評を次のように書いている。

「相手にのまれていると、陸上競技の100m走に例えると、10mぐらい後ろからスタートするようなもの。今はドイツでプレーしている選手がたくさんいて、普段から戦っている相手。同じスタート位置からよーいどんで勝負できる。そういうマインドセットはものすごく大事なものだ」

バスケットボールが世界を相手にアップセットを起こすためには、NBA、ユーロリーグなどで活躍する日本人選手が数多く育つことである。そのためにはミニ、ジュニア、ユース世代の草の根活動で、日頃から「世界基準」の指導とレフリング、世界を目指す「野心」のマインドセットなどが必要である。世界を目指す地産地消での選手育成に期待したい。